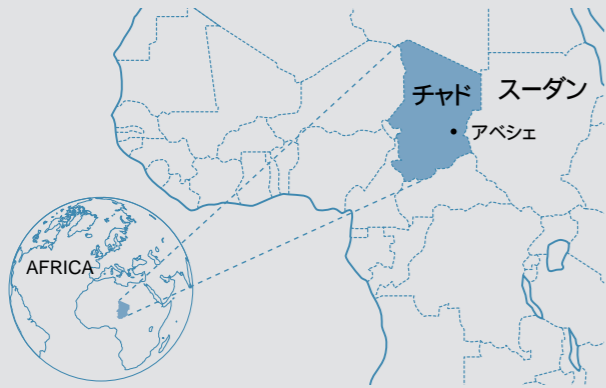
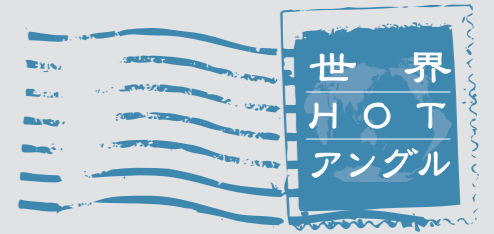


# from Chad



普段は殺風景なアベシェ中央広場に多くの人々が集まった。式の見届け役としてカントン長や国連関係者など約50人が出席した



## チャドの伝統に触れた瞬間

イスラム社会における君主の称号で、「権威・権力」を意味するスルタン。2005年4月、JICA事業で訪れたチャド東部のワダイ州で、偶然にもスルタン就任式に出席することができた。現地の伝統儀式を目の当たりにした瞬間は、まさに一生涯心に残る思い出となった。

### チャドにスーダン難民が押し寄せた

2005年4月、チャド・ワダイ州のスルタン就任式に偶然にも遭遇し、式に出席するという、日本人として初めてと思われる極めて貴重な体験をした。きっかけは、JICA調査団としてチャド東部ワダイ州の州都アベシェに約4カ月間滞在したときのことだった。

アベシェの人口は5万人とも20万人ともいわれる。数がこれほど違うのは政府による正確な統計資料がないからだ。私の印象ではせいぜい7〜8万人といったところだ。町の



ワダイ州の州都アベシェの本通り。両側には日干しレンガの家々が並び、住民の移動手段はロバか徒歩

一角にある市場は小さく、商店も個人経営のみ。市民の移動手段はロバか徒歩で、車を利用するのは援助関係者がほとんどだという。

乾期(11月〜4月)の気温は50度近くまで上がり、町中を貫流する涸れ川(ワジ)に水はない。午後になるとあまりの暑さに通りの人影はまばらになり、ロバやヤギが木陰や塀の陰で休んでいるのをよく見かけた。ひとたび郊外に出れば、ステップ気候の厳しい気象条件にさらされた土漠が広がっており、人の住む痕跡はない。

03年2月、ワダイ州とワディ・ワライ州の東部地域に、約20万人ものスーダン難民が押し寄せた。スーダン西部ダルフル地方で内戦が勃発し、行き場を失った人々が国外へ流出したためだ。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)は、ワダイ州



パールデカントンでは、長の自宅前に各村長が寄り合って話をしていた。カントン長、村長は世襲制

民との間に摩擦が生じていた。地元住民の生活改善活動が求められていたものの、それまでチャドを支援したことのない日本は、国情や対象地域の実情を把握していなかった。そこで、難民キャンプ周辺のコミュニティ支援に向けたプロジェクト形成調査をJICAが実施し、私はその調査団員として現地に派遣された。

### スルタン就任式に出席

スルタン就任式の数日前、式に出席するというドイツ技術協力公社(GTZ)のプロジェクト関係者から招待を受け、急ぎよ私も参加することになった。9時半ごろ到着するとアベシェ中央広場の会場は、頭にターバンやイスラム帽をかぶり、ガラビアと呼ばれる立派な刺しゅうが施された伝統的な服を着た50人程度の人々が埋まっていた。彼らはワダイ州の各カントンの長やその関係者で、いわば就任式の見届け役といったところだ。

ワダイ州のスルタンは、14世紀に成立した旧ワダイ王国の末裔だといふ。17世紀にイスラム王国となったワダイ王国は、その後隣国のスーダンやエジプトとの交易で栄えたが、

1912年に侵攻してきたフランスの支配下に入った。村長、カントン長、スルタンは原則的に世襲制で、前任のスルタンが04年8月に死去したため、彼の息子(推定35〜40歳)がスルタンに就任することになった。

来賓の到着が続き、やがてスルタンが現れた。中央の台座に背筋を伸ばして座ったスルタンは、細身の小柄な人物だった。自治大臣から伝えられたチャド大統領の言葉には、同国の歴史やスルタンの存在意義などが込められていた。

その後、台座から立ち上がったスルタンに、赤いガウンのような伝統衣装が着せられ、頭には白いターバンが巻かれた。そして、やや遠くでよく見えなかったが、スルタンが金色のザンビア(半月形の短剣)を腰に差したように見えた。これがスルタン就任の印だったのだらう。周囲のざわめきは最高潮に達し、いすに座っていたカントン長たちも興奮して立ち上がった。スルタンはすぐに退席したが、周囲の人々が短剣を頭



新スルタンの就任後、飾り立てた馬に乗り、剣を掲げながら会場を駆け抜ける男たち